

B. 主要種の個体数変動

今期調査期間中に記録された種の中で、述べ個体数上位 10 種の個体数変動を以下に記す。

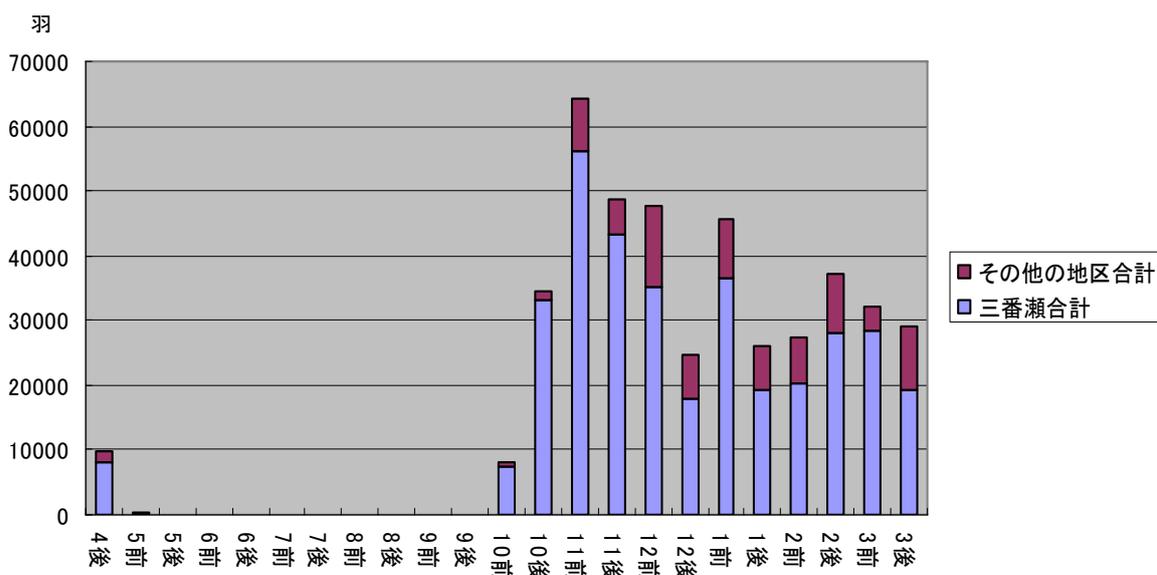
① スズガモの個体数変動

〔図 8〕にスズガモの個体数変動を示す。棒グラフは、三番瀬海域（日の出、塩浜、ふなばし三番瀬海浜公園の合計）と他の地区の合計とに分けて示す。その総計が、調査地区全域の延べ個体数である（②カワウ以下も同様）。

スズガモは冬鳥で、10月上旬に飛来し4月前半まで東京湾に生息する。10月後半には3万4441羽となり、11月後半に最大値6万4131羽となり、以後3月後半まで2万5000羽から5万羽未満の間を推移した。

このように、三番瀬海域での確認比率は高く、スズガモは三番瀬海域を頻繁に利用している。しかし、近年は、採餌場としてではなく、主として休息の場として利用することが多い。さらに、観察地点も不安定となり、しばしば移動を繰り返す。行動パターンが変化した原因を究明する必要があるだろう。

また、11月後半の最多数から減少した部分は、冬期にどこで採餌しているのだろうか？ 東京湾全域での調査が要請される所以である（22頁、〔図 21〕を参照）。

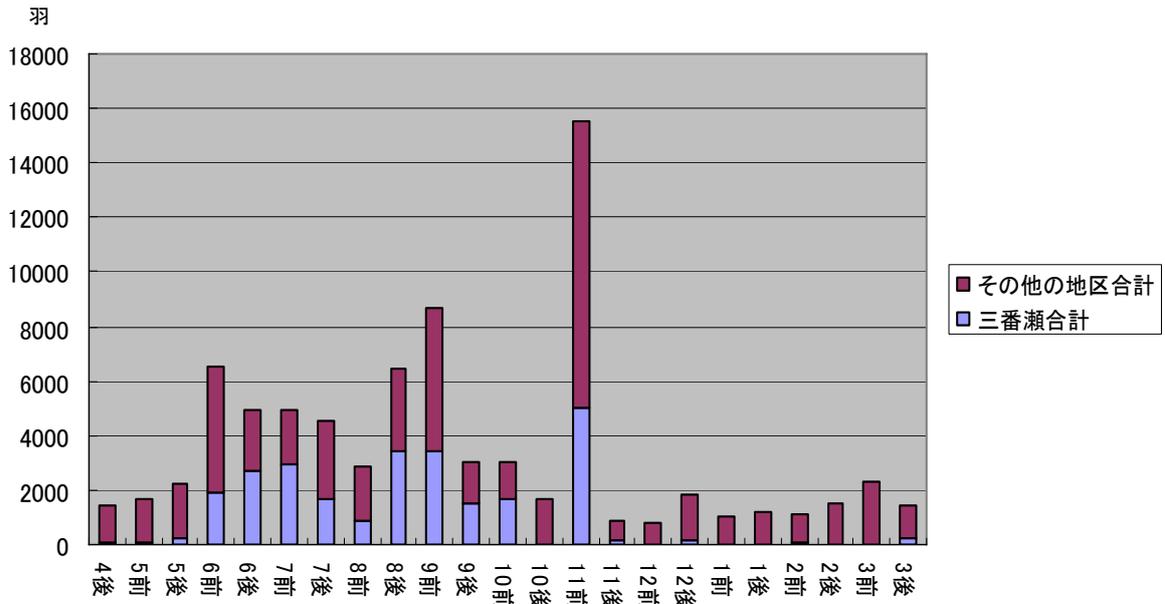


〔図 8〕 スズガモの個体数変動 (2007年4月～2008年3月)

②カワウの個体数変動

カワウは、東京湾奥部では行徳鳥獣保護区で繁殖し、東京湾内各地や千葉県内外の内水面に採餌に出かける。

〔図 9〕によれば、三番瀬以外の地区での合計確認数に季節的変動が大きい。この変動は、東京湾内各地で採餌する個体数の変動を示すものであり、湾内の餌資源の量とパラレルであろうと思われる。冬期に延べ個体数が減少するのは、非繁殖期には内陸部に罫が出来るからであろう。



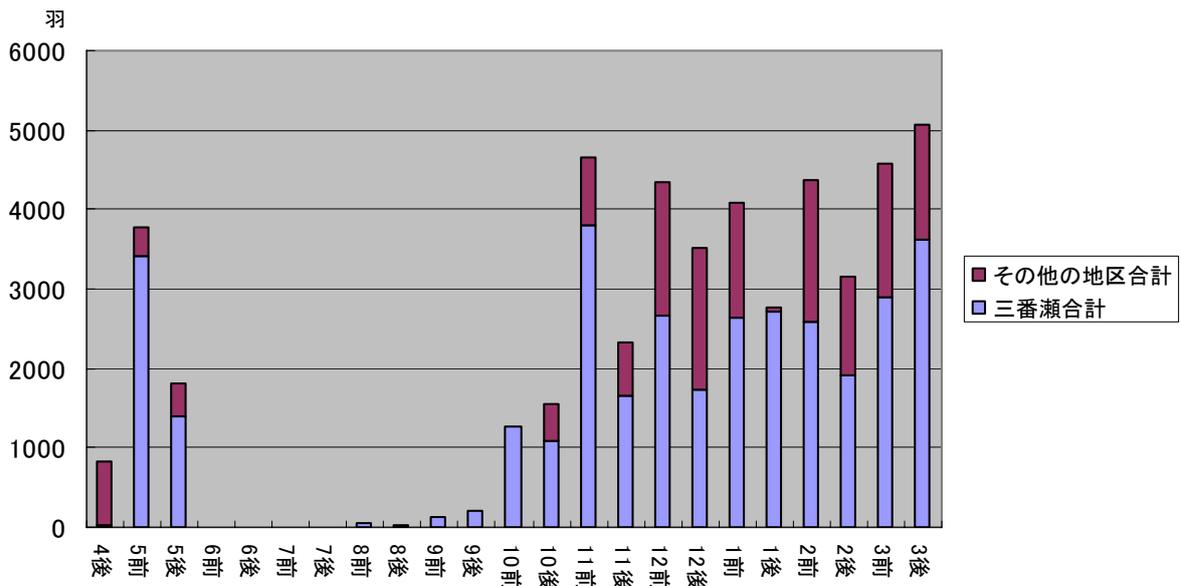
【図9】カワウの個体数変動（2007年4月～2008年3月）

③ハマシギの個体変動

ハマシギは冬鳥として飛来する。[図10]によれば、10月前半に1000羽以上が飛来し、5月後半まで越冬し、毎日、潮の干満に応じて、三番瀬と谷津干潟の間を行き来する。

11月前半から越冬期間中は、2500羽から5000羽の間を推移した。

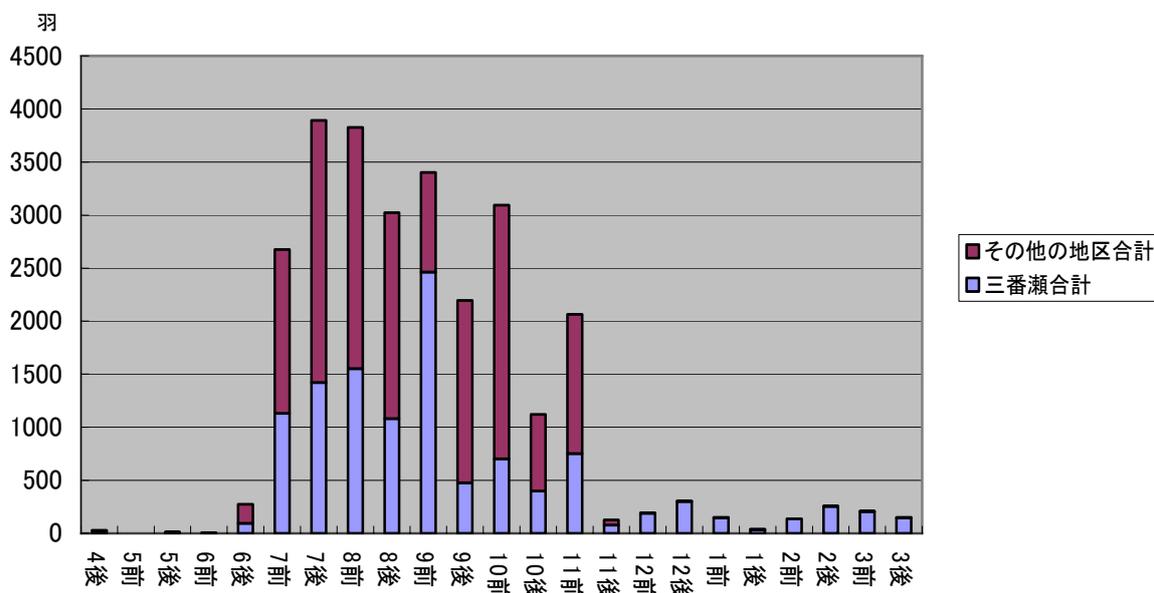
ハマシギは、東京湾内では、三番瀬・谷津干潟での越冬個体群の他に、盤洲にも1500羽～2000羽ほどの越冬個体群がある（日本野鳥の会千葉県支部・港湾空港技術研究所、2004。「千葉県盤洲干潟に飛来する鳥類の同定および計数業務報告書」）。両群には、1日の中での行き来はないが、季節的には行き来があるのかもしれない。



【図 10】 ハマシギの個体数変動 (2007 年 4 月～2008 年 3 月)

④ウミネコの個体数変動

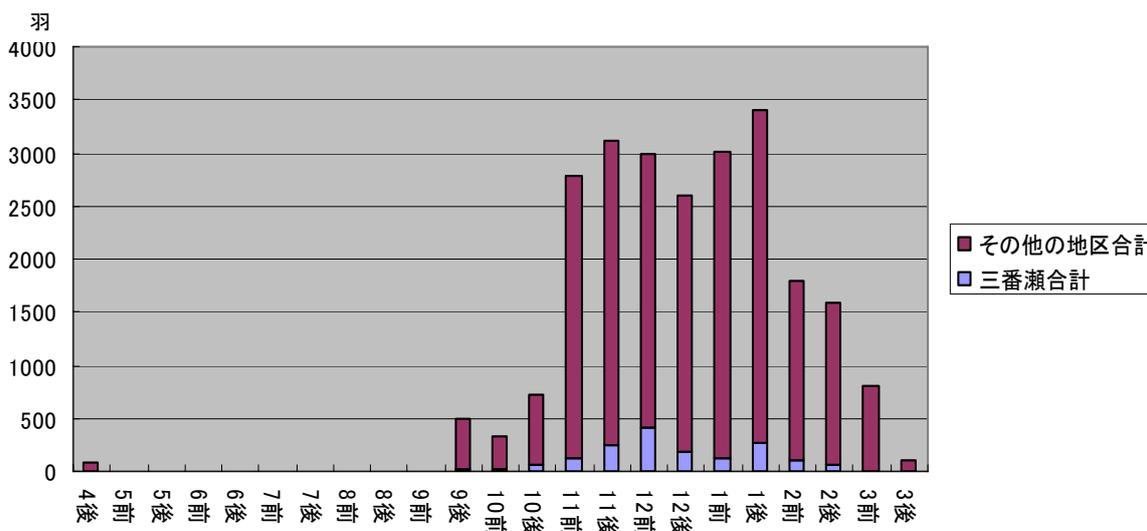
ウミネコは非繁殖期に飛来する。[図 11] によれば、繁殖の終わった 7 月前半に 2500 羽を越し、11 月前半まで、概ね 2000 羽以上が記録され (10 月後半は少ない)、11 月後半以降春までは 500 羽を切る。千葉県内でも、銚子港などでは冬中多くの個体が見られる。銚子港は水揚げ量が多い漁港で、餌資源の差が冬期の個体数の差に反映しているのだろう。



【図 11】 ウミネコの個体数変動 (2007 年 4 月～2008 年 3 月)

⑤オナガガモの個体数変動

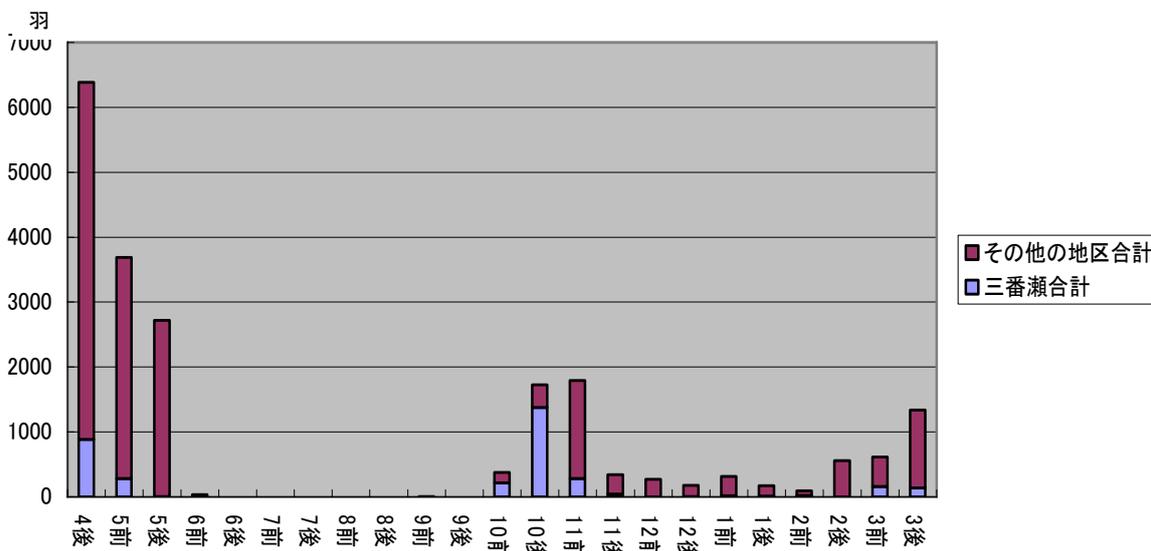
オナガガモは冬鳥として飛来する。[図 12] に見るごとく、三番瀬以外での確認数が多かった。今期の調査では、宮内庁新浜鴨場への入域が猟期中も認められ、確認個体数が増加したものと思われる。鴨場では 11 月前半からの 2000 羽前後のオナガガモが確認されることが多かった。



[図 12] オナガガモの個体数変動 (2007 年 4 月～2008 年 3 月)

⑥ユリカモメの個体数変動

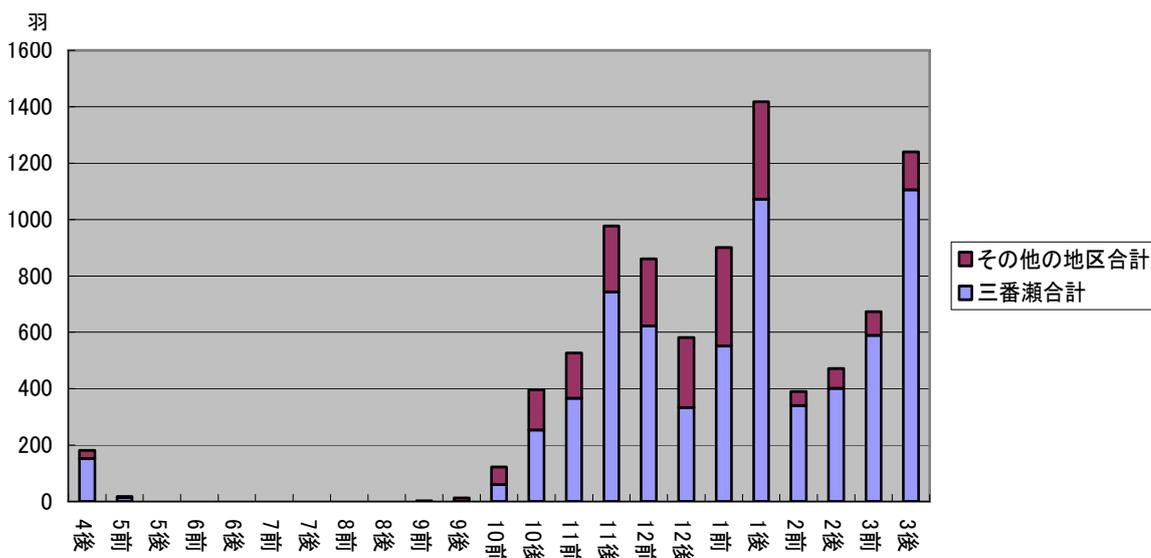
ユリカモメは冬鳥として飛来する。[図 13] に見るごとく、10 月前半に飛来し、10 月後半、11 月前半と 1700 羽以上が記録されたが、それ以降の冬期には個体数を減らし、春先に増えて、4 月後半には最大値 6386 羽が記録された。出現した調査地区は、4 月後半、舞浜では 5303 羽など、三番瀬以外の海域であることが多かった。



[図 13] ユリカモメの個体数変動 (2007 年 4 月～2008 年 3 月)

⑦ヒドリガモの個体数変動

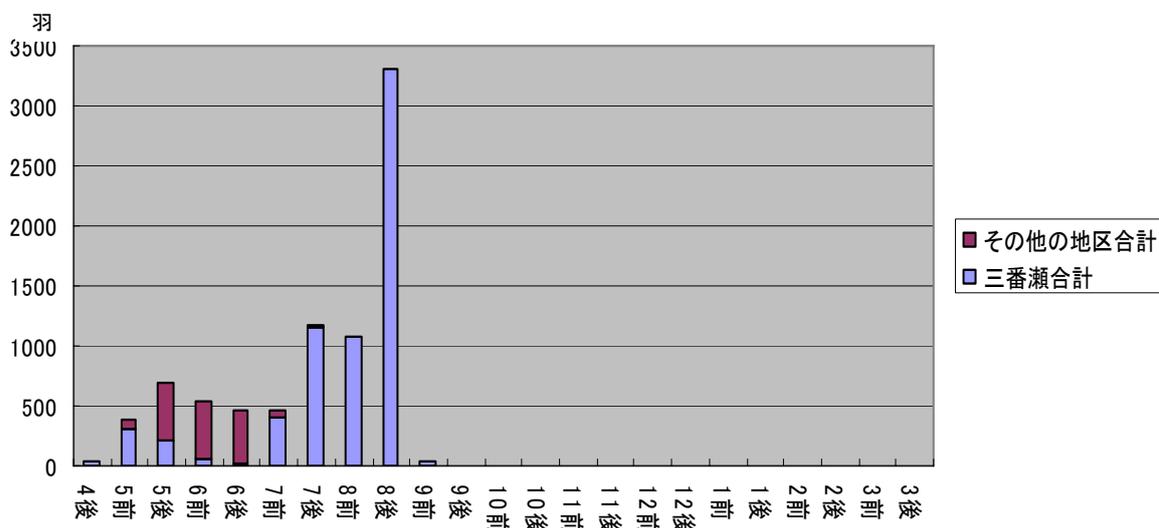
ヒドリガモは冬鳥として飛来し、[図 14] に示すごとく、9 月後半に飛来し、4 月後半に渡去する。植物食で、陸上の緑色の草や、海中のアオサなどを主に採食するので、三番瀬海域での確認比率が高く、三番瀬ではアオサを捕食する場面がしばしば観察された。1 月後半、3 月後半には 1000 羽を越えたが、厳冬期には個体数が落ち込んでいる。その原因は何であるのか、今後の究明が俟たれる。



[図 14] ヒドリガモの個体数変動 (2007年4月～2008年3月)

⑧コアジサシの個体数変動

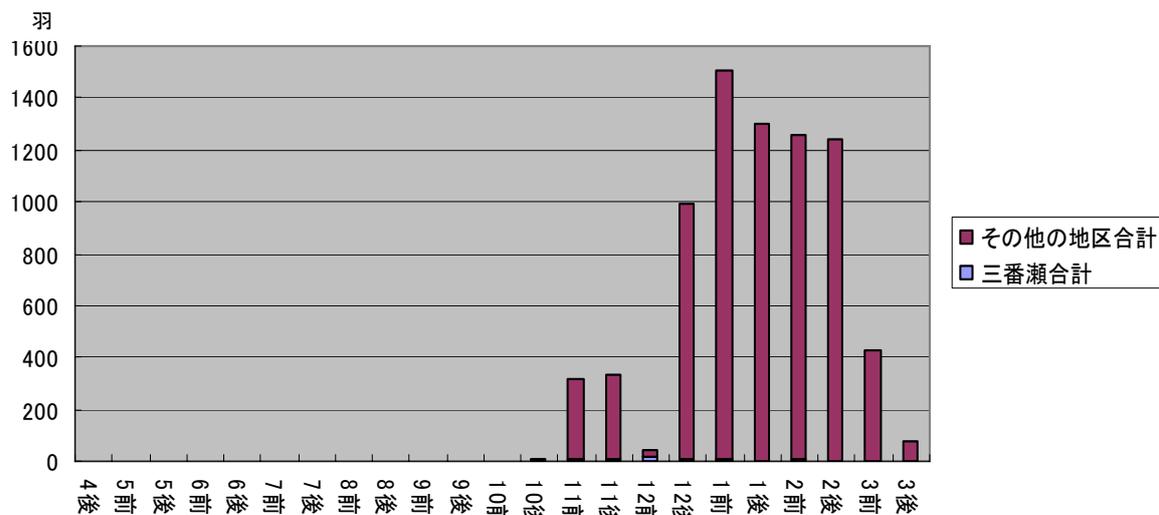
コアジサシは夏鳥として飛来し、裸地で繁殖する。[図 15] に示すごとく、4月後半に飛来し、9月前半まで生息する。近年、湾岸の埋立地の裸地が減少し、繁殖個体数が激減しており、繁殖時期の確認個体数が少ない。繁殖の終わった7月後半からは1000羽を超え、8月後半には3300羽を超えた。南下の渡りの前に、三番瀬や盤洲に結集するのだと言われるが、その数も減少している。



[図 15] コアジサシの個体数変動 (2007年4月～2008年3月)

⑨カンムリカイツブリの個体数変動

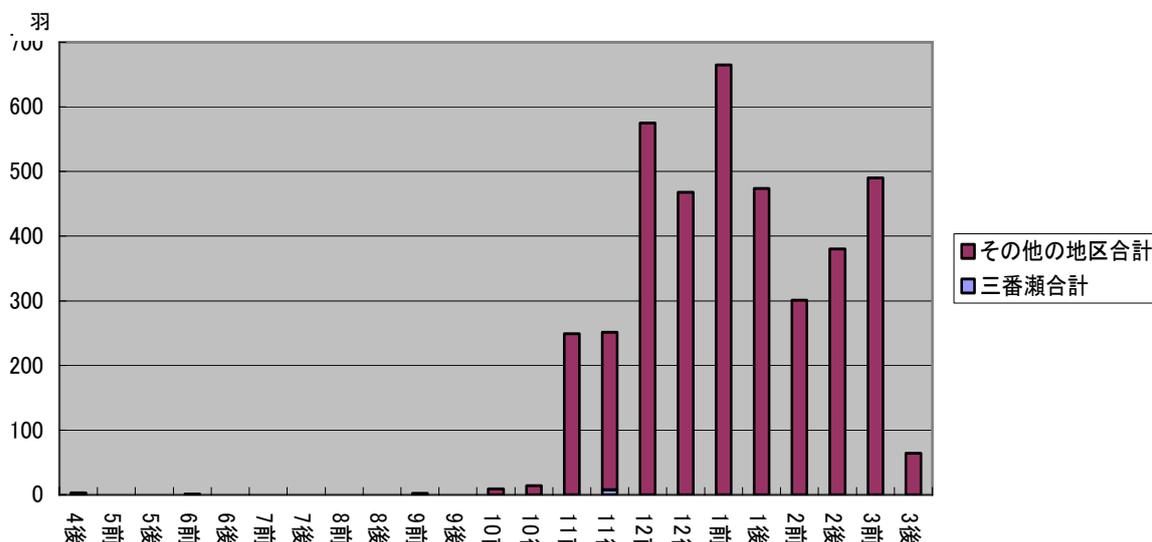
カンムリカイツブリは冬鳥として飛来する。[図 16] に示すごとく、12月後半から2月後半にはほぼ1000羽以上が確認され、最大値は1月前半の1506羽であった。調査地区別では、舞浜がもっとも多く、1月前半の1450羽、1月後半の1220羽、2月前半の1160羽などの記録があった。しかし、その舞浜のデータも、平成14年度1月後半の6016羽などに較べて、相当に減少していると言えよう。



【図16】 カンムリカイツブリの個体数変動 (2007年4月～2008年3月)

⑩ホシハジロの個体数変動

ホシハジロは冬鳥として飛来する。[図17] に示すごとく、11月前半から3月前半に200羽以上が記録された。宮内庁新浜鴨場では、冬期間中、200羽から500羽を越える記録があった。



【図17】 ホシハジロの個体数変動 (2007年4月～2008年3月)

C. その他、注目すべき種の個体数変動

上位10位には入らなかったが、ミヤコドリとオオバンの2種は、近年著しく個体数を増やしており、今後の動向が注目されるので、特記しておきたい。

①ミヤコドリの個体数変動

ミヤコドリは、個体数は増加させている種であり、今後の動向に注目したい。

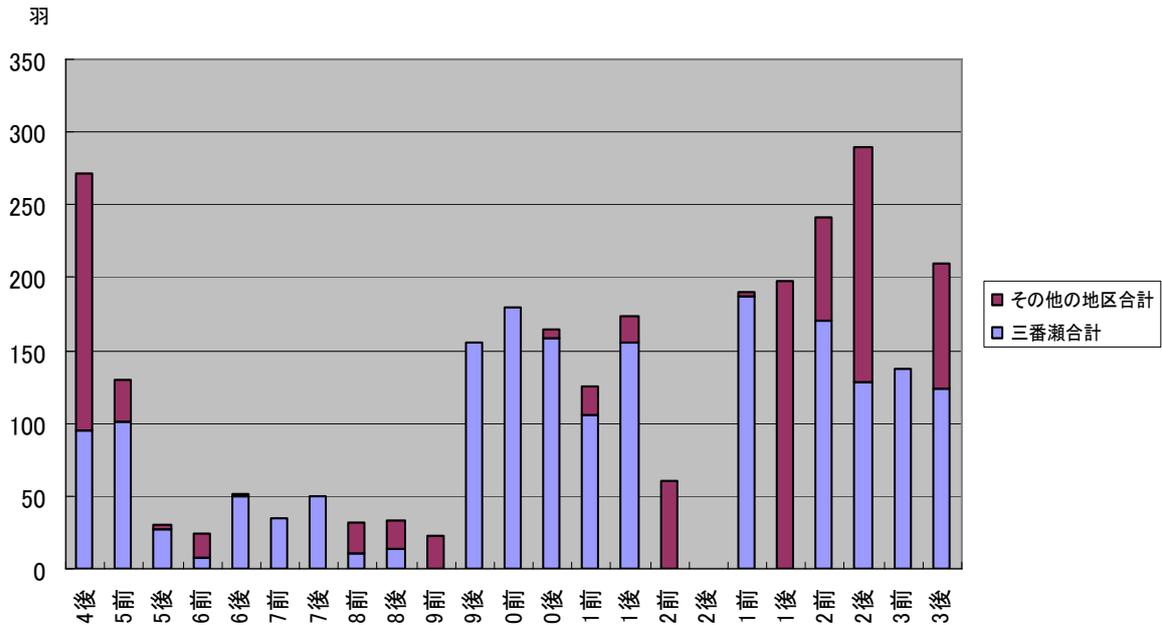
[図18] に経月変化を示す。ミヤコドリは、現在、三番瀬と周辺地域で通年見られるようになっているが、個体数が増えるのは9月後半からである。

9月後半には、塩浜で85羽、ふなばし三番瀬海浜公園で70羽が記録され、三番瀬全域での合計数は155羽であった。また、2月後半には、調査地区全体の延べ個体数が290羽であった。

同一調査地点での最大値

本調査では、すべての出現鳥類において、延べ個体数を採用しているが、ミヤコドリは今後も個体数を増加させることが予想され、延べ個体数とともに、個体数の実数を把握しておく必要あると考え、同一調査地での最大数を明記しておきたい。

ふなばし三番瀬海浜公園では、10月前半に180羽、1月前半に187羽の記録があり、それが実数だと考えた方がいいと考える。



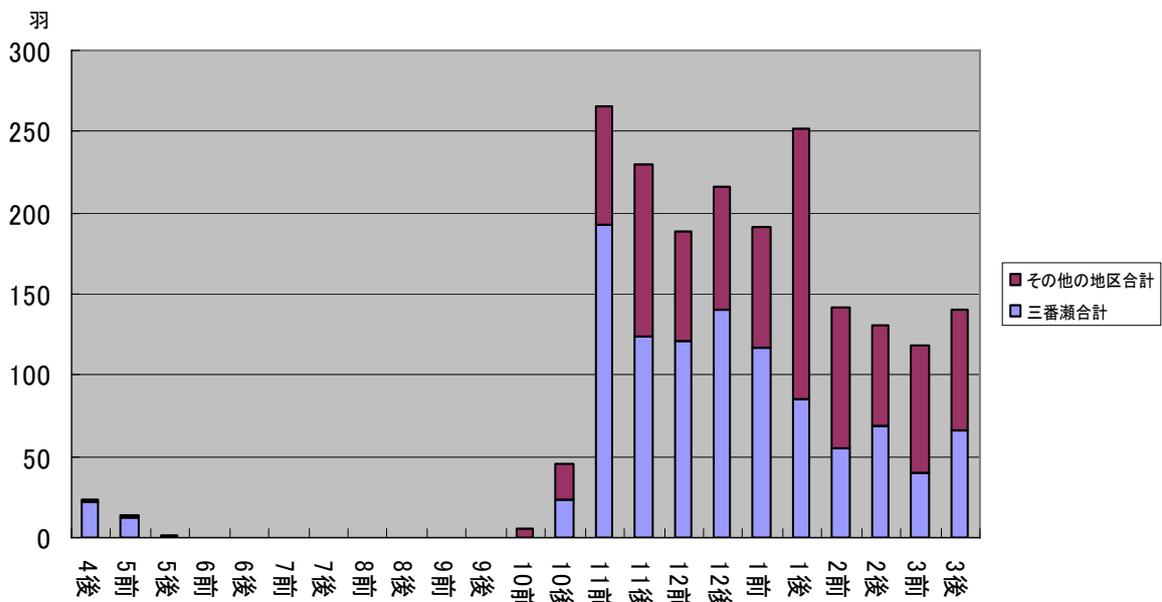
【図18】 ミヤコドリの個体数変動 (2007年4月~2008年3月)

②オオバンの個体数変動

オオバンは植物食の鳥で、もともと淡水域の開水面の周辺で繁殖し、同様の環境で越冬していたが、近年、冬期に海水域で越冬する事例が観察されるようになってきている。東京湾奥部の他に、銚子漁港、九十九里浜に流入する中小河川の河口部などでの越冬事例も増加している。

今期の調査では、[図19]に示すごとく、10月後半から個体数を増し、11月前半には、最大数265羽を記録している。なお、三番瀬海域での、個体数比率が高いことにも注目すべきであろう。

三番瀬海域では、近年アオサの繁茂が著しく、オオバンの個体数増加が、アオサの繁茂と無関係ではないように考えられる。



【図19】 オオバンの個体数変動

3. 主要種 43 種の動向

(1) 主要 43 種について

本調査報告書をまとめるに際して、主要 43 種に関して、過去のデータとの比較をし、個体数変動の動向が分かるように整理した。

ちなみに、「主要 43 種」とは、「市川二期地区・京葉港二期地区計画に係る見直し案における影響評価予測結果報告書」（平成 11 年）で選定されたもので、以下の①～③の選定基準のいずれかに該当する水鳥である。

- ①出現個体数が多く、生態系において大きな位置を占める種であること。
- ②稀少性が高く、社会的に特別な配慮が求められる種であること。
- ③ラムサール条約に基づく水鳥類の個体数クライテリアに該当する種であること。

(2) 主要 43 種の動向分析の一例……スズガモを例に……

A. 3Dグラフ作成に関して

1987 年以降のデータは、「鳥類補充調査別冊 三番瀬主要鳥類経年出現状況」（平成 15 年 3 月）にまとめられている。そのデータを継承すべく、その後の調査記録類（「平成 17 年度 三番瀬シギ・チドリ類採餌状況調査報告書」、「平成 17 年度 三番瀬スズガモ等消化管内容物調査報告書」）と、今期の調査記録を連結させ、43 枚の 3D グラフをカラー刷りで作成した。

このグラフにより、過去 20 年間の、種ごとの、また調査地点ごとの個体数変動が、詳細に読み取れる。ここでは、出現個体数のもっとも多いスズガモをサンプルとして示す（[図 20]）。

B. 3Dグラフに見る、スズガモの個体数変動

スズガモは、冬期に個体数を増加させる傾向がある。主たる確認地は、舞浜、千鳥、日の出、塩浜、ふなばし三番瀬海浜公園、茜浜、豊砂、幕張の浜である。

スズガモは、淡水ガモ類とは異なり、全期間を通じて増減は認められるものの、2005～2006 年の冬まではほぼ同数が認められたが、今期の調査では、確認個体数が少ない。

ただし、2007 年～2008 年にかけての冬には、盤洲、富津海域での確認個体数が例年より多く、東京湾全体では、例年通りの個体数が飛来しているものと思われる。年次によって、分布状況が異なるのは、海域ごとの餌資源の存在量によるものであろう。